

リリアン・ヘルマンに見る自立する女性

—『子狐たち』を中心として—

吉 成 怜 子

〔抄 録〕

リリアン・ヘルマン (Lillian Hellman, 1905-1984) は女性としてつねに自立をめざしていた。というより、人間としていかに生きるかということを問いつめれば、自立がまず前提にあった。1930年代のアメリカで、女性の自立が現在の社会よりも容易ではなかった時代に、男性の庇護の下に生きることをよしとしないヘルマンがいた。女性の自立を確立する一つ的手段としての富、それを追いかける19世紀末に生きるレジーナ (Regina) という女性を、戯曲『子狐たち』 (*The Little Foxes*, 1939) のヒロインとしてヘルマンは据える。レジーナは男性と伍して社会を生き抜くために画策する。経済的自立を果すためとはいえ、冷酷とも思える行動をとる。彼女が自立をめざすさまを精神的自立から、経済的自立への道をたどりながら考察してゆく。

キーワード リリアン・ヘルマン、レジーナ、自立、富

はじめに

リリアン・ヘルマンは『子狐たち』で、レジーナという魅力的な女性を描く。悪女ともとれるその裏面には、女性であるがゆえの差別によって、抑圧されつづけてきた過去を背負う。すなわち経済的力のない女性にとって、男性の保護の下でしか生きる術がなかった。作者ヘルマン自身もつねに自立をめざし、格闘してきた。弱者にはやさしいアメリカという国で、弱者と思われていた女性が、男性と同等に戦い抜こうとすると社会は牙をむく。ヘルマンにとっては、女性として男性社会という主流から身を引いているがゆえに、男性社会の矛盾が見えやすい立場にいたといえる。その矛盾を女性ならではの細やかな視点で、戯曲の中に注ぎこんでいった。

この作品の7年後の1946年に発表された『森の中の別の場所』 (*Another Part of the Forest*) では、『子狐たち』のストーリーから20年前に遡って、若き日のレジーナと彼女を取り巻く人々を描いている。ヘルマンは、レジーナが富への欲望をあらわにする理由をその作品で鮮明にする。すなわち、聖書の言葉が生きているアメリカ南部で、聖書の下で平等であるはずの女性は男性中心の社会機構、もっといえば、経済機構に組み込まれていた。女性であるがゆえに味わ

う敗北感、男性と互角には戦えないという屈辱、それが20年後のレジーナとして『子狐たち』で描かれ、彼女に非情ともとれる行動をとらせる。レジーナが夫、娘、兄弟とも決別してまでも死守しようとしたもの、それは富を基盤とした自立に他ならない。

1. 精神的自立を出発点として

レジーナの夫ホーレス (Horace) は、冷徹ではあるけれど非情な人間でもない。むしろ黒人奴隷に対する優しさは、登場する白人男性としては人間味をかもし出しているといえる。しかし、レジーナにとっては、それは問題ではない。結婚生活において、いささかの打算を持ってホーレスに嫁いだとはいえ、彼は彼女自身が愛し、選択した男性ではなかった。兄のベン (Ben) やオスカー (Oscar) によって、父の財産は管理され、女性であるレジーナには財産の一部さえも手に入らなかった。そして兄ベンから、経済力のある男性の下に嫁がざるをえない状態に追い込まれていた。それ自体が人間として個人が抹殺されて、自己を確立するという個人の行為は踏みにじられている。その中で、唯一彼女の意志を示すことができる行為、それは夫婦間の肉体交渉を拒否することが残された道だった。レジーナは、そのときの様子を病院から帰宅したホーレスに次のように言う。

REGINA: (*nods*) Remember when I went to Doctor Sloan and I told you he said there was something the matter with me and that you shouldn't touch me any more?

HORACE: I remember

REGINA: But you believed it. I couldn't understand that. I couldn't understand that anybody could be such a soft fool. That was when I began to despise you.⁽¹⁾

夫ホーレスがあっさりとレジーナの申し出を受け入れたことが、二人の確執の始まりだった。それはホーレスのやさしさと解釈すべきか、それとも彼女への性的関心が薄いだけでいたのか、いずれにせよレジーナにとっては、妻として不信感が頭をよぎる。男性としてのホーレスは、レジーナとの肉体交渉の代替として愛人を求めた。しかも数人の愛人との交際は、レジーナにとっては耐えられないことだったのであろうが、男性であるホーレスにとっては、唯一人の愛人との交際ではないことが、妻レジーナへの精神的愛を未だ残していると宣言しているようだ。ホーレスにはただの肉欲だけを愛人に求めて、精神的な愛はレジーナにささげているとする。それは男性であるホーレスには、妻から完全なる許可を獲得したと感じた上での行動であつたろう。しかしレジーナは違っていた。経済的基盤を与えられていない環境の下で、女性として彼女がホーレスを結婚相手に選ばざるをえなかった。それをホーレスは、少しも理解していなかった。ホーレスは彼女を、主婦であり母親であり家庭内の仕事をする人間としか理解してい

なかったのではないだろうか。もちろん、その中に夫に肉体的に奉仕する仕事も含まれているのは当然だ。レジーナは、どんなに手腕を発揮しても、賞賛を浴びることのない家事という役割には耐えられなかったのであろう。特にレジーナにとっては、男性にはあらゆる面で権力行使が可能なのに、女性にはそれが実行できないもどかしさを覚える。レジーナのような中産階級では、自らが家事労働をすることなく、召使への指示や指導が主な家事労働ではあるが、男性と同等の仕事が与えられることもなく、家庭内で日々を過ごし、老境に入り、やがて死を迎える。レジーナは、19世紀の女性としてはごく普通の家庭の主婦であった。男性への隷属的立場はどうあがいても払拭されない。自己主張の強いレジーナにとって、兄たちに仕向けられた結婚への屈辱は、何にもまして男性から蔑視されていると感じたことだろう。後にレジーナが問題にしたホーレスの交際相手である愛人たちと、まるでレジーナが同列に座するかのようだった。レジーナにとって、ホーレスが真実の愛を彼女にささげているとは思えなかったのだろう。1900年当時としては、男性としてホーレスのとった行動を責めることはできない。しかし、レジーナにとっては20年前に愛した恋人が、彼女より戦場での戦いを選んだように、彼女が彼を追うことができなかった後悔を二度と味わいたくはない。今度こそシカゴのマーシャル(Marshall)という事業家に賭けて自立しようとする。それは女性として、男性と同等の権力を得たいと考えてのことであろう。彼女のなりふりかまわない行動は、夫ホーレスを見殺しにすることもいとわない。そんな母レジーナに対して、理性と強い意志を持って、娘のアレクサンドラ(Alexandra)は自立を試みる。

アレクサンドラは、従兄弟のリーオ(Leo)と政略結婚させようとする伯父たちの企みを伯母のバーディ(Birdie)から聞いても、母や伯母がたどったのと同じ轍を踏むことはしない。しっかりと自立の道をゆく。父を見殺しにした母がシカゴに同行するようと言っても彼女は同意しない。アレクサンドラは、母レジーナや伯父たちが利得のために手段を選ばないその行為に怒りを覚える。身近な人々に犠牲を強いてまでも、自分たちの欲望を満たそうとする人々に対して、傍観しない姿勢、つまりそれらの人々と真っ向から戦いを挑もうとする。そのため母と決別をする。

ALEXANDRA: You couldn't, Mama, because I want to leave here. As I've never wanted anything in my life before... All in one day: Addie said there were people who ate the earth and other people who stood around and watched them do it. ... Well, tell him (Ben) for me, Mama, I'm not going to stand around and watch you do it. Tell him I'll be fighting as hard as he'll be fighting (*rises*) some place where people don't just stand around and watch.

REGINA: Well, you have spirit, after all. I used to think you were all sugar water. We don't have to be bad friends. I don't want us to be bad friends, Alexandra. ⁽²⁾

レジーナは娘の成長ぶりに驚く。アレクサンドラは、レジーナとは違った形で自立を果そうとする。レジーナは、富を携えて自立をしようとするが、同性として無から出発しようとする娘のアレクサンドラになかば羨望さえ感じている。娘の強さに対して、同じ戦う女性として連帯感さえ覚える。20年前のレジーナと同年代の一女性として、アレクサンドラの行動は新しい時代の息吹さえ感じさせられる。母レジーナとは際立って異なる若いアレクサンドラを理想像として、作家ヘルマンは旅立つアレクサンドラに未来を託すべく最終幕に上記の台詞を選ぶ。そこには、確固とした正義感と意志を併せ持つ自立した女性がそこにいる。

アレクサンドラを新しい時代へ歩を進める理想像として描写してはいるが、前述したように1880年に設定した『森の中の別の場所』での結婚前のレジーナの周辺の女性たちの自立も、新しい扉を開こうとするものである。

レジーナなどの資産階級とは比較できないくらい最下層にいた女性として、売春婦ローレット (Laurette) は、自身の意志で環境を切り開いてゆく。次兄オスカーの愛人であった彼女は、資産階級のオスカーの父にも一歩も屈しない。権力者への戦いは、そのまま彼女の自立となる。資産家の子息であるオスカーの止めるのも聞かずに、自分の意志でニューオーリンズへと出発する。ニューオーリンズ、それは新たな売春婦としての旅立ちであれ、ともかくローレットは自立した。売春婦であれ、中産階級に仲間入りできるかもしれない結婚という二文字を拒否した。彼女のオスカーへの決別は、猛烈に彼女の自立を表す。

OSCAR: (*to nobody*) You know what she did? She spat in my face and screamed in front of everybody that she was glad I wasn't coming, that she had never cared for me, and had only been doing the best she could. If I didn't have the money, what the hell did she need me for? ⁽³⁾

ローレットがオスカーの下を去っても、追いかけてゆき、彼女を扶養する財力はオスカーにはない。その点では、ローレットの強さが表現されている。このとき、長兄のベンは、オスカーとレジーナに資産家の相手と結婚するように仕向ける。二人ともそれを拒否して自立することはできない。レジーナはそれまでの裕福な暮らしを続けたければ、資産家と結婚することしか残された道はない。あえて、苦難の道を選ぼうとはしなかった。ローレットとレジーナとの対比が興味深い。

それとは対照的に、暴言も吐かず、静かな、しかし強い行動にでるレジーナの母のラヴィニア (Lavinia) がいる。彼女は夫に結婚指輪を返し、福祉活動のために旅立ちをする。自分の進むべき道を見極めて、富も家族も捨てる。その行為は神々しい。

ローレットといい、ラヴィニアといい、あえて苦難の道を選んでも自立して前に進む。レジーナは、その自立を苦難の道ではなく、富をひっさげて自立しようと20年後に訪れる機会を逃

さない。

夫ホーレスに対して、肉体の結びつきを自らの意志で拒否したことは、レジーナにとって精神的自立の始まりであるといえる。時代的に考えれば、寝室をともしない行為は、そこに女性としての主張が強烈だと判断できる。ともすれば男性主導の夫婦生活に女性の意志が反映されること、それ自体彼女の男性に隷属しない自立した生き方が窺える。次の階段である経済的自立はシカゴ在住のマーシャルの出現で具体化される。レジーナは、自立の一つの手段として女性の魅力を利用する。彼女にとっては、夫ホーレスを魅了した容姿を果敢なく発揮できる機会に遭遇したといえる。自立を果すため選んだ男性は、実業家であるが妻帯者だ。レジーナにとっては、再婚によって、再び男性の庇護の下で生活するつもりはないのであろう。それはちょうど作者ヘルマンが、最初の結婚相手と離婚し、後に非婚のままでミステリー作家であるダシール・ハメット (Dashiell Hammett, 1894-1961) と30年以上の同棲生活を送ったように、結婚という足枷は必要なかった。むしろ男性という保護者はレジーナには、抑圧と感じたことだろう。

このドラマの1900年と設定された時代は、新世紀に手が届こうとしているとはいえ、19世紀のアメリカの規範が生きていた。女性の家庭での地位は前述したように男性と制度上、法律上、平等の権利が与えられていたとはいいがたい。とくに、家族関係については、1765年にイギリスで出版されたウィリアム・ブラックストーン (William Blackstone, 1723-1780) の『イギリス法釈義』 (*Commentaries on the Laws of England*) の慣習法が、基本的に独立戦争後のアメリカの各州で採用されていた。家庭での夫と妻の立場を物語るものとしては興味深い文章である。なお、この慣習法を20世紀に至るまで、アメリカのフェミニストたちは繰り返し取り上げて、槍玉にあげているところを見ると、男性、あるいは女性の規範の根底に残像として色濃く存在していたのであろう。

By marriage, the husband and wife are one person in law: that is, the very being or legal existence of the woman is suspended during the marriage, or at least is incorporated and consolidated into that of the husband: under whose wing, protection, and cover, she performs everything; ...⁽⁴⁾

ここで注目したいのは、法律上の夫婦が＜one person＞だとする条文の内容である。実際の法は、財産権、選挙権など19世紀までに修正は行われていた。しかし法的効力はどうであれ、女性としての人格が夫に男性と平等の扱いを受けていたかという点、そうともいえない。女性が軽視されていたことも事実として受け止めなければならない。ブラックストーンの法の条文にあるように、男性の翼に覆いかぶさされていてその姿さえ見えぬにいた妻レジーナは、夫との＜one person＞ではなく、自分は別の人格であると、その存在を叫び続けてきたのであろう。

彼女の隠蔽された自我は、夫ホーレスを見殺しにするという皮肉な結果となった。死に至らしめるという卑劣な行動を考察するとき、次のような解釈ができる。すなわち、夫という人間が自分を支配して、彼の庇護の下でのみ存在していたレジーナという女性が、一人の人間として夫の影から顕現することは、彼女にとっては夫を排斥することしか思いつかなかったのではなかろうか。それこそが、彼女のもがき苦しんでやっと手に入れた個人としての自我の確立であると解することもできる。

2. 精神的自立から経済的自立へ

レジーナが実行する自立に欠かせないもの、それは富であった。この作品から富に関連した語を本作品のコンコーダンス⁽⁵⁾から普通名詞を抽出し、使用頻度の回数を検証すると、図らずもmoney、bond(s)という単語が上位に抽出できた。レジーナを始めとして、いかにこの作品が富にこだわりつづけたかは、これらの語彙からも判断できよう。富に付随した権力をも求めた女性レジーナを検証し、彼女の渴望した自立を考察してゆく。

夫ホーレスへの謀反の計画は、思いがけなく訪れる。夫は心臓を患い入院することになる。そんな中、シカゴのマーシャルとともに出資して当地に綿工場を建設しようとする話がもちあがる。レジーナは経済的な自立がかなえられる機会に遭遇する。レジーナたちとは対照的に、貴族的階級に属していた兄嫁のバーディは、つねに夫の顔色を窺いながら生活をしている。レジーナの父や兄たちに先祖伝来の南部の土地を奪われ、夫から去ることもできず、閉塞感にさいなまれている。自らの人生を切り開くという行動を起こすこともできず、酒に溺れている。そんな兄嫁のバーディにレジーナは、未来の扉を開く手助けとしてのmoneyを語る。

REGINA: Don't look so scared about everything, Birdie I'm going to live in Chicago. I've always wanted to. And now there'll be plenty of money to go with.⁽⁶⁾

レジーナの兄たちは綿工場から大金を得ようと画策する。工場からの利潤配当をめぐるいがみ合いに、女であるレジーナも参戦できることになる。銀行家としてのホーレスの豊富な資金をレジーナから引き出そうと長兄のベンと、次兄のオスカーがホーレスを説得しようとする。レジーナは、自分がその工場の共同経営者にと彼女の心は動く。シカゴという大都会に自立して生活できる基盤となる、綿工場への出資、それを夫から引き出したいと切に願う。レジーナの精神的自立は、夫との肉体交渉を拒否し、一個人として自我を主張するだけでは完結しない。経済的自立を伴ってこそ、彼女の自立が完成する。

REGINA: I've given my word that Horace will put up the money. That should be enough.⁽⁷⁾

レジーナはここですでに夫より優位になっている。さも夫がそう望んでいるかのように、夫を支配する妻としての立場を兄たちに主張する。夫がもし彼女の自立を阻止しようとするなら、どんな行為も辞さない。そう決心させたのも兄たちとの確執からだ。夫とともに兄たちに対しても優位にいるレジーナは、これこそ彼女が待ち望んでいたことだった。夫から自立はしても、兄たちの束縛を逃れるためには自分の取り分を有利にしなければならない。退院してきた夫のホーレスは投資を拒否する。二人の兄たちが、ホーレスの債権を無断で工場の投資にまわしたことを知ったレジーナは、債券盗用を公表すると脅迫する。

REGINA: I'm smiling Ben. I'm smiling because you are quite safe while Horace lives. But I don't think Horace will live. And if he doesn't live I shall want seventy—five per cent in exchange for the bonds.⁽⁸⁾

20年前に兄ベンに支配されていたレジーナはもうそこにはいない。兄たちと一歩も引けをとらない女性がそこにいる。彼女は夫から精神的に自立する行動を起こし、次に経済的自立という強力な武器も手中に収めようとする。

19世紀末の急速な工業化はアメリカ社会を変貌させていった。しかし、『子狐たち』でも描かれているように、シカゴのマーシャルが南部に工場を建設することを決意させた動機を考察すると、黒人を中心とした安価な労働賃金など、アメリカ南部と大都市との経済格差を挙げることができる。大都市との生活水準の格差は、明らかに男性ばかりか女性の経済的自立をも阻んでいた。中産階級を中心とした女性の高等教育など、女性の自立を促す要素も格段と増加していった。しかし、南部社会はアメリカの中でも異質といわれるように、保守的な地域のみで歩み続けた。黒人社会の上に君臨する白人社会の女性たちは、なお黒人に対して優越感を抱いていた。そのことは一層女性の近代化を遅らせることになる。シカゴなどの大都市と並ぶ近代化は、まだこの『子狐たち』の時代からさらに、数十年を要して実現した。レジーナが悪辣な手段で獲得した経済的自立は、単に時代がそうさせたのか、或いは南部という女性蔑視の地域がそうさせたのか、いずれにせよ彼女を追い込んだ社会にもその責の一端がないとはいえない。

3. ヘルマンと女性の自立

1950年代ヘルマンが左翼運動に加担したかどで、悪名高い非米活動調査委員会のブラックリスト入りをした⁽⁹⁾ときは、当時の保守的な人々からは売国奴のような扱いさえ受けていたことだろう。何が悪で、何が善かという判断は時代が下す。アメリカがマッカーシーの赤狩りに踊らされた時代は、ヘルマンに対しては悪女という呼称を与えていたかもしれない。マッカーシ

ズムに酔った人々がヘルマンに対しては、純粹に作家としての評価ではなく、売国奴という称号を加味して評価したこともあったろう。ヘルマンと同様に、ともに暮らしていたダシール・ハメットは非米活動の罪で召喚され、その後投獄されていた。苦難の時代も、師であり、伴侶であり、親友であったハメットを彼女は支え、自立し続けてきた。彼を二度と刑務所に送りたくなかったヘルマンは、彼を説得しようとするが、

When we were a few steps from Sixth Avenue, he stopped and said, "Lilly, when we reach the corner you are going to have to make up your mind that I must go my way..."⁽¹⁰⁾

ハメットはつねにヘルマンを突き放していた。しかし、ハメットはヘルマンのよき伴侶だったのだ。同じ六番街の街角で、

When I caught up with him, he said, "I haven't thought about a drink in years. But I'd like one. Anyway, let's go buy one for you."⁽¹¹⁾

ヘルマンは自立して生きることでハメットとは対等な愛を育んできた。そして、作家として向上することができた。『子狐たち』についてヘルマンは、

I was on the eighth version of the play (*The Little Foxes*) before Hammett gave a nod of approval and said he thought maybe everything would be O.K. if only I'd cut out the "blackamoor chitchat." Even then I knew that the toughness of his criticism, the coldness of his praise, gave him a certain pleasure.⁽¹²⁾

彼女はハメットを師として尊敬していた。自立は彼との共同生活から学んだのだ。生涯ハメットと結婚という制度にこだわらなかったのは、彼女の独立した精神、確固たる信念の下で生きるというヘルマンらしい生き様をそこに見ることができる。

おわりに

ヘルマンの描く女性たちの自立を考察してきたが、『子狐たち』のレジーナの自立を目指すためのなりふりかまわない行為、それは自分の生活から排除すべき人間として夫ホーレスを切り捨てることになる。死の危険が迫った心臓病の夫から薬を遠ざける、その行為を本論では決して肯定するものではない。いかなる手段をとっても、自分の障害となる人間を排除することの卑劣さは容認できるものではない。しかし、それまで圧倒的に男性社会であったビジネスの世

界に踏み入ろうとするレジーナの行為は、利己的な判断の下での非情な行為であるとはいえ、自立という道への彼女なりの一歩だといえる。それはなぜかヘルマンの劇作家への道とも重なるものがある。ヘルマンが女性劇作家として、当時は稀有な存在だったことを考えれば、社会的に孤軍奮闘するヘルマンのさまは、自立という目標に向かって一人戦うレジーナの行為とどこか共通項が見え隠れするようだ。

ヘルマンが『子狐たち』でわれわれに託すメッセージは、最後のアレクサンドラのなにものにも屈せず自立してゆこうとする精神にある。しかしその自立は、母とは対照的に正義感あふれたものになっている。それこそがヘルマンのもっとも基底にある意図であろう。

〔注〕

- (1) Lillian Hellman, *Six Plays by Lillian Hellman*, Random House, Inc., New York, repr., 1960, p.212.
- (2) *Ibid.*, p.225.
- (3) *Ibid.*, p.389.
- (4) William Blackstone, *Commentaries on the Laws of England*, intro. by Stanley N. Katz, Vol. I *Of the Rights of Persons*, Oxford, Clarendon Press, 1765-1769; repr., Chicago, University of Chicago Press, 1979, p.430.
- (5) <http://www.public.iastate.edu>. Iowa State University Play Concordances, *The Little Foxes* by Lillian Hellman, 2002.
- (6) Lillian Hellman, *Six Plays by Lillian Hellman*, Random House, Inc., New York, repr., 1960, p.161.
- (7) *Ibid.*, p.166.
- (8) *Ibid.*, p.219.
- (9) Lillian Hellman, *Scoundrel Time*, Little, and Brown Company, New York, 1976.
- (10) Lillian Hellman, *An Unfinished Woman*, Little, and Brown Company, New York, 1969, p.120.
- (11) *Ibid.*
- (12) Lillian Hellman, *Pentimento*, Little, and Brown Company, New York, 1973, p.172.

〔参考文献〕

- 有賀夏紀、『アメリカ・フェミニズムの社会史』、勁草書房、1988。
- Hellman, Lillian, *Pentimento*, Little, and Brown Company, New York, 1973.
- Katherine, Lederer, *Lillian Hellman*, Twayne Publishers, Boston, 1979.
- Schlueter, June, ed., *Feminist Readings of Modern American Drama*, Fairleigh Dickinson University Press, London, 1989.

(よしなり れいこ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導：加藤 芳慶 教授)

2004年10月15日受理

